平成 26 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	26Ｋ08	氏　名	武山　聡子
研究主題 ―副主題―	言葉掛けの視点を用いた授業改善に関する一考察 ―知的障害特別支援学校高等部「作業学習」の分析を通して―		
所属校	都立八王子東特別支援学校	派遣先	帝京大学教職大学院

項　目	内　容
Ⅰ　研究の目的	近年、東京都では、自閉症の生徒の「働く力」の育成として、作業学習の指導内容・方法の充実が求められている。具体的な対応課題として、物理的・時間・活動それぞれの構造化が挙げられている。また、「教員の働き掛けを最小限にして、生徒の自発的な動きや気付きを引き出す」ことも作業学習のポイントとして挙げられている。これまでの教員経験においても、教員の言葉が多くなっていないか、効果的な言葉掛けができているだろうか、という課題を常々もっていた。 目指すべき作業学習の授業は以下の二つを満たしたものである。 ①生徒が主体的かつ自発的に作業に取り組むこと。 ②生徒が意欲・関心をもちながら、生徒対教員または生徒同士においてのやり取りから、学びの機会を得ること。 本研究では、二つを達成できる授業づくりを目指すために、言葉掛けの視点を用いて作業学習の分析を行い、授業改善に向けて作業学習での指導の在り方を検討していくことを目的とする。 仮説①　「生徒主体」の作業学習とするため教員の言葉掛けを厳選し、少なくする。 仮説②　生徒の関心・意欲を高め、学びの機会をもたせるため、効果的な言葉掛けを行う。 なお、この仮説は、物理的・時間・活動それぞれの構造化が、効果的に行われていることを前提として考えることとする。
Ⅱ　研究の方法	本研究では、発話プロトコル法を用いて分析を行う。対象授業の発話をビデオで記録し、逐語録を作成する。教員の言葉掛け評価視点図の中項目（小川、2000）に基づき、発話カテゴリーに分類し、分析を行う。生徒の発話は、言語発達期における言語行為（Dore、1975）による九つの基本的言語行為により分類する。生徒の行動は、精神遅滞児教育における授業分析システムの開発（柘植他、1992）に基づいた行動カテゴリーに分類する。 首都圏内のＡ特別支援学校知的障害高等部第１学年男７名、女２名、計９名のうち、対象生徒１名とする。対象生徒Ｂは、自閉症の生徒で、発語は２語文程度であり、単語を発することも多い。作業班の中で、サブティーチャーの指導が必要な生徒の一人である。年間指導計画における、作業学習の授業（50 分×３コマ）計４回分（９月参観授業１回、サブティーチャー授業１回、10 月サブティーチャー授業１回、11 月サブティーチャー授業１回）を対象とする。

Ⅲ　研究の結果

仮説①→授業の実施を重ねたが、生徒の「自発行動」は増えなかった（表１参照）。授業４において、「自発行動」が少ない理由として考えられることは、報告の機会を設定しなかった点にあると考えられる。「自発行動」は、ほとんどが生徒自ら教員に関わる行動であるため、報告場面や実績表の設定により、授業１は「自発行動」が増えていた。また、作業の中の「自発行動」は「学習動作・作業」との区別がつきにくいことも、自発行動が少ない要因の一つになったと考えた。

表１　生徒の行動カテゴリーの割合（%）

	自発行動	学習動作作業	学習動作作業以外
授業１	41.2	52.9	0
授業２	23.5	47.1	5.9
授業３	17.6	56.9	19.6
授業４	5.9	70.4	11.1

サブティーチャーとして入った授業３回を比較してみると、２回目の授業は圧倒的に、「指示」が多かったが、３回目の授業と４回目の授業では、「指示」が少なくなり、「受容」と「賞賛」の割合を増やすことができた（表２参照）。

表２　教員の発話カテゴリーの割合（%）

	指示	受容	賞賛
授業１	35.0	15.0	0
授業２	46.2	7.7	7.7
授業３	18.6	30.2	11.6
授業４	16.2	13.5	10.8

仮説②→サブティーチャーとしての授業３回分を比較した場合、「発問」を意識して増やすことができたことが分かる（表３参照）。生徒の「学習動作・作業」も発問に比例して伸びることが分かる。

また、ある場面では、生徒の発話カテゴリーのうち「行為の要求」を引き出すことができ、意欲・関心を損なわずに指導できた場面が確認できた。

表３　教員の発話と生徒の行動の関係の割合（%）

	発問	助言	学習動作作業
授業１	5.0	10.0	52.9
授業２	0	7.7	47.1
授業３	9.3	4.7	56.9
授業４	13.5	5.4	70.4

Ⅳ　考察

作業学習を行う上で、教員の言葉掛けを改善したり工夫したりすることは大切であることが分かった。今後は、生徒の活動量だけでなく、生徒が記述した記録などを手掛かりに、生徒側の受け止め方について把握していきたい。作業学習での教員は、指示だけや一緒に作業するだけでなく、授業内の構造化を進めた上で、生徒の学びを作り出す言葉掛けが必要である。

今後も言葉掛けを大切にして、授業改善に取り組んでいきたい。